

権利・報酬プロジェクト
大学教職員調査：最終報告書

2006 年 1 月

Melanie Bates、Steve Loddington、Sue Manuel、Charles Oppenheim

JISC 情報システム合同委員会
ラフバラ大学

目次

表一覧	3
図一覧	4
1. 前書き	5
2. 方法	5
2.1 パイロット調査	6
3. 個人情報	6
3.1 分析	7
3.2 考察	9
4. リポジトリの利用状況	11
4.1 分析	12
4.1.1 リポジトリの利用	15
4.1.2 コンテンツの品質	15
4.1.3 著作権問題	15
4.1.4 期待を満たしたか	16
4.2 考察	18
5. リポジトリへの寄稿の現状	19
5.1 分析	19
5.2 考察	23
6. リポジトリへの将来の寄稿	24
6.1 分析	24
6.2 考察	30
7. 教育資料に付随する権利	31
7.1 分析	31
7.2 考察	34
8. その他のコメント	34
8.1 分析	35
8.2 考察	36
9. 結論	36
参考文献	38

表一覧

表 1：Q1c. 勤務先の機関と学科の名称を記入してください	7
表 2：Q1a. 専門分野は何ですか	7
表 3：Q1b. 職名を記入してください	8
表 4：Q1d. 学術分野での勤務年数を選んでください	8
表 5：Q2. 以下のどこに教育資料を置いていますか	9
表 6：Q2. その他	9
表 7：「Q1d 学術分野での勤務年数」と「Q2_VLE」のクロス集計	10
表 8：Q3. 「学習オブジェクト・リポジトリ」（または教育資料のデータベース）に関して あなたの経験にあてはまる欄にチェックを入れてください	12
表 9：Q3. 他のリポジトリ	13
表 10：Q4. 以前にリポジトリ中の教育資料をダウンロードまたはブラウズしたことがある 場合、システムとその中の教育資料からどのような印象を受けましたか	14
表 11：Q4. リポジトリを使いたくない場合は、その理由を記入してください。	16
表 12：Q5. 理想的な教育資料リポジトリがあるとすれば、どのようなコンテンツが役立つ と思いますか	17
表 13：Q5. その他	17
表 14：Q6a.教育資料をリポジトリに入れたことがある場合、最も多く寄稿したりリポジトリ はどれですか	19
表 15：6b. このリポジトリを選ぶ主な理由に関し、該当する基準にチェックを入れてくだ さい	20
表 16：Q6b. その他	21
表 17：Q7. リポジトリに教育資料を寄稿したことがない場合は、寄稿しない主な理由を挙 げてください	21
表 18：Q7. その他	23
表 19：「Q1d 学術分野での勤務年数を選んでください」と「Q6b 所属機関内での評価が上 がる」のクロス集計	24
表 20：Q8a. 教育資料を最も喜んで寄稿したいと思うリポジトリの種類	24
表 21：Q8b. その教育資料リポジトリのアクセスのタイプ	25
表 22：Q8b. その他	26
表 23：Q9. 理想的リポジトリに最も進んで寄稿したいと思うのはどのようなタイプの教育 資料ですか	26
表 24：Q9. その他	27
表 25：Q10. 理想のリポジトリでは、どのようなタイプの査読または品質管理の仕組みを期 待しますか	27
表 26：Q11. 今後のリポジトリへの寄稿を考えた場合、以下の理由は寄稿を促す動機として	

どの程度の影響力を持ちますか.....	28
表 27：Q12a. リポジトリへの寄稿に対して報酬を得られるとした場合、以下の例の中で寄稿する意欲を引き出す効果が最もあるのはどれですか.....	29
表 28：Q12b. ほかに効果のある要因があれば記入してください.....	30
表 29：Q13. あなたの所属機関では教育資料の著作権を誰が所有していますか.....	31
表 30：Q14. リポジトリに提出した教育資料に対して他人が行う行為の中で、どれなら許可してもよいと思いますか.....	32
表 31：Q15. 教育資料の利用に対してどのような制約または条件を（もしもあれば）設けたいですか.....	33
表 32：Q15. その他.....	33
表 33：Q16. あなたの教育資料を利用可能にすることに関し、ほかに何かコメントがあれば記入してください.....	35

図一覧

図 1：資料共有の境界.....	10
------------------	----

1. 前書き

JISC(情報システム合同委員会)が資金を拠出した「混合型機関リポジトリにおける権利と報酬」プロジェクトの一部として動機調査を実施した。英国継続教育（FE）機関の教員全員と教育・学習（T&L）分野の専門家を対象とするアンケート調査票をオンラインで配布した。調査票の狙いは、指導・学習資料のデポジットに機関リポジトリ（IR）を利用することに関する意見を集めることだった。特に注目したのは次の2点である。

- リポジトリにデポジットする教育資料に対し、個人がどのような「権利」を持つことを期待するか
- どのような「報酬」が、教育資料のデポジットを促す動機になるか。

この報告書では、パイロット調査に関する簡単な報告を含め、調査票を作成する過程で行った活動の概要を報告する。また、調査の広報活動についても詳しく説明し、回答の分析結果を報告する。

2. 方法

プロジェクト・チームが調査票の設問を考案し、ラフバラ大学の教員および情報専門家の一部を対象としてパイロット調査を実施した。合計 6 回のパイロット調査を実施し、そのうち 4 回は教員を対象とした調査、2 回は情報専門家を対象とした調査である。これらのパイロット調査には印刷した調査票を使ったが、回答者には正式調査での配布方法（すなわちオンラインでの電子配布）を知らせた。パイロット調査で寄せられたコメントについては、後述のパイロット調査セクション（4.1）で考察する。

オンライン調査票を作成し、2005 年 9 月 5 日から 10 月 31 日までオンライン上に公開し、回答できるようにした。430 件の有効回答が記録され、重複して提出された回答は分析から除外した。図書館・情報統計部門（LISU）が調査結果の統計分析を行い、有意な相関関係を特定した。その中でも重要な相関関係をこの報告書で報告する。LISU からの報告書は付属資料 A に掲載した。

幅広い意見を反映するために、できる限り多くの機関からできる限り多くの人の参加を得られるよう努めた。それを達成するために、次のような諸方面に電子メールを送り、この調査を広く宣伝した。

- 高等教育学術団体（HEA）の代表者
- 英国高等教育機関の教育担当副学長、教育学部長、学部長ならびに学科長
- 学習・教育支援センター職員
- 各種メーリングリスト

オンラインで電子メールアドレスを入手できた英国の HE 機関 98 カ所に 755 件の電子メールを送信し、HEA の 56 人に連絡を取った。CETL ネットワーク、lis-link、lis-sconul をはじめ、15 のメーリングリストを対象としてメッセージを送信した。配布した電子メールでは、この調査について仲間に宣伝するよう受信者に依頼した。HEA のウェブサイト、電子掲示板、メーリングリスト等々を介した情報の配信により、それが実際に行われたことを確認した。ラフバラ大学教育担当副学長は、全教員に調査票への記入を依頼する電子メールを送信することに同意した。その結果、このグループからの回答が増えた。

一部の回答者からは、国際的リポジトリに関する言及がないこと、時にはこれが正しい解決策かもしれないという指摘があった。また、教育資料を共有する動機として、経済的要因が偏って重視され、その代償として利他的な理由が軽視されていると、調査を批判する意見もあった。

2.1 パイロット調査

パイロット調査は一度に平行して実施するのではなく、順次実施した。これらの調査の結果、調査票で使われる言葉の中に、一般に知られていないものがあることが判明した。そこで、調査票の先頭の導入部分に提示した用語の定義に修正を加え、用語の追加を行った。また、提示される情報の範囲を回答者は承知していただけないかという提案があった。このため、目次を付けた。調査票の長さが問題と思われた。それが原因で、この話題に関心を持つ人しか調査に回答しなかった可能性がある。受け取ったコメントを考慮し、また、可能な限り、1 件のパイロット調査の後に、次のパイロット調査に備えて設問を修正した。

パイロット調査の回答者に対し、教育資料の共有に関する学科の方針についてたずねる設問を追加した。2 人が学科外とは共有しないと述べたが、方針を明示した文書の存在を誰も知らなかったため、これは問題ではないとみなされた。

3. 個人情報

調査票の最初のセクションでは、回答者の専門分野、職名、所属機関と学科の名称、学術分野での勤務年数をたずねた。最後の設問では、教育資料の利用可能性と保管について現在使っている方法の詳細をたずねた。

3.1 分析

表 1：Q1c. 勤務先の機関と学科の名称を記入してください

機関のタイプ	合計
1992 年以前の英国の総合大学	221
1992 年以降の英国の総合大学	143
英国の FE カレッジ／総合大学付属カレッジ	42
その他	20
無回答	4
合計	430

表 1 に回答者が勤務する機関のタイプを示した。調査票は英国全国の幅広い機関から提出され、機関の数は 88 に上った。ラフバラ大学教員からの回答数は 58 件だった（13.5%）。

専門分野は主要科目に関する JACS 科目コード体系を使って分類した（日付なし）。それらを表 2 にまとめた。複数の専門科目を挙げた回答者もあるので、合計数は調査への回答数を上回る。

表 2：Q1a. 専門分野は何ですか

科目分類	合計数	比率
C、D、F（生物科学、獣医科学、農業および関連科目）	87	20.2%
L、M、N（社会学、ビジネス・経営学）	81	18.8%
X（教育）	66	15.3%
G（数学とコンピュータサイエンス）	61	14.2%
A、B（医学および医学関連科目）	43	10.0%
H、J、K（エンジニアリング、工学、建築、建設・設計）	39	9.1%
P（マスコミと情報サービスを含むドキュメンテーション）	33	7.7%
V、W（史学と哲学、創造芸術とデザイン）	28	6.5%
Q、R、T（言語学、古典と関連科目、語学、文学と関連科目）	28	6.5%
合計	466	

表 3：Q1b. 職名を記入してください

職名	合計数	比率
講師	118	27.4%
上級講師／科目リーダー	106	24.7%
教授／講座長	42	9.8%
センター所長／学科長／大学院代表	38	8.8%
研究助手／准教授／特別研究員／大学助手	37	8.6%
教育・学習補助職員	29	6.7%
技術／コンピュータ／IT 担当職員	15	3.5%
教育助手／大学教員／技術指導員	14	3.3%
図書館／情報サービス担当職員	8	1.9%
プロジェクト・オフィサー／プロジェクト・コーディネーター／コンサルタント	8	1.9%
准学部長／学部長	6	1.4%
その他	3	0.7%
継続教育／カレッジ教員	2	0.5%
大学経営幹部	2	0.5%
秘書、事務職員、補助職員	1	0.2%
学生支援サービス職員	1	0.2%
合計	430	

広範な職位の人々から回答を受理したが（表 3）、2つのカテゴリーの占める率が特に高かった。それは「講師」（27.4%）と「上級講師／科目リーダー」（24.7%）である。学術分野での勤務年数はさまざまで、15 年を超える経験を持つ人が 36.3%、5 年未満が 20.2%だった（表 4）。

表 4：Q1d. 学術分野での勤務年数を選んでください

年数	合計数	比率
15 年超	156	36.3
6～10 年	93	20.7
11～15 年	89	21.6
5 年未満	87	20.2

次の設問では、現在の教育資料の保管方法についてたずねた。過半数（53.5%）が勤務先機関のバーチャル学習環境（VLE）を利用していた。カイ二乗検定を使った統計分析により、1992 年以降の機関に勤務する回答者の方が、VLE を利用する傾向が有意に強く、FE に勤務

する回答者は、その傾向が弱いことがわかった。51 人（11.9%）が教育資料をリポジトリに保管していると報告した。これは学術分野に教育資料用リポジトリをすでに積極的に利用している人があることを示している。

表 5：Q2. 以下のどこに教育資料を置いていますか

保管場所	数	比率
VLE	230	53.5
学科内の保管場所	115	26.7
個人ウェブサイト	115	26.7
その他	85	19.8
リポジトリ	51	11.9

「その他」の回答欄には、合計 100 人の回答者により、112 件の保管オプションが記録された。それら追加された保管場所を表 6 に示す。

表 6：Q2. その他

保管場所オプション	数	比率
他の電子保管場所	35	31.3
VLE／MLE／評価システム	25	22.3
パソコン	14	12.5
デジタル保存媒体／アーカイブ	14	12.5
リポジトリ	9	8.0
ハードコピー	9	8.0
なし	3	2.7
不適用	3	2.7
合計	112	100.0

個人的な保管場所と誰でも入手可能な公開ソリューションが合わせて報告された。使っているシステムの性質を理解していないことを示す証拠がある。230 人の回答者が VLE を使っていると報告したが、さらに 25 人（6%）が専用または機関内のシステムを「その他」の保管ソリューションとして挙げた。

3.2 考察

調査票に対して多種多様な人々から回答が寄せられたが、機関内の意志決定者であり、また、ほとんどの場合、文化的な変容を引き起こす際の中心になる上級管理職から情報を得られたことは貴重だった。英国の大部分の大学から回答が寄せられ、偏りのない全般的な

状況を反映する結果が得られたことも貴重だった。

学術分野での勤務経験が15年を超える人が回答者の3分の1以上を占めることを考えると、教育資料の作成と共有に関する彼らの姿勢と習慣を変えることは難しいと思いがちである。しかし、最もよく使われていた保管場所のタイプはVLEで、回答者の半数以上が教育資料をVLEに保管していた。VLEは比較的新しい技術であるにもかかわらず、かなりよく使われていることを、この結果は実証している。表7は調査の回答者数、学術分野での勤務年数、教育資料をVLEに入れる習慣があるかどうかを示したものである。

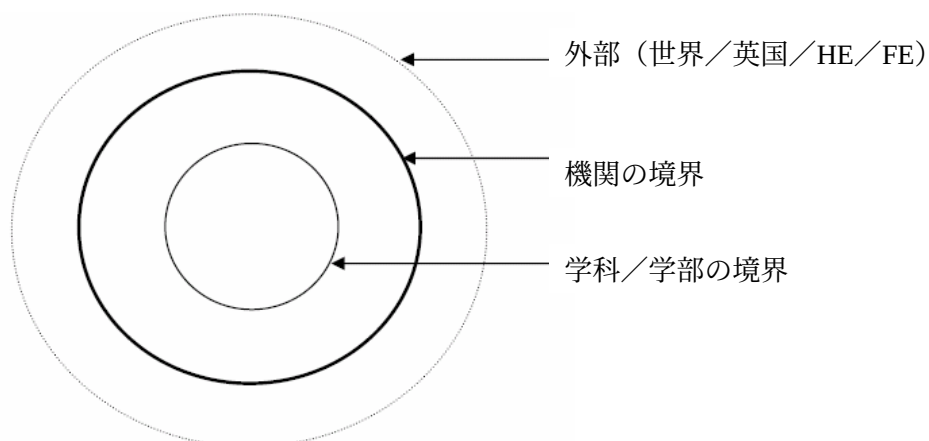
表7：Q1d 学術分野での勤務年数と Q2_VLE のクロス集計

年数	Q2_VLE		合計数
	いいえ	はい	
5年未満	56	31	87
6～10年	40	53	93
11～15年	34	55	89
15年超	67	89	156
合計	197	228	425

これは学術分野で働いた期間が長いほど、作成したものをVLEに保管する傾向が強くなることを示している。従って、勤務経験の不足がVLEに教育資料を保管することに対する障壁になっているかもしれない。

機関内でなら進んで教育資料を共有する人の数がそれでも多いことは明らかである。機関外との共有はあまり希望されていない。図1に資料の共有に関する境界を図示する。

図1：資料共有の境界



線の色が濃いほど境界の力が強いことを示している。現在、多くの人が機関内の保管場所

に教育資料を置いていることがわかる。それらの教育資料は個人的に使うために学科境界内に維持されるか、または VLE に保管されている。VLE 内の教育資料は当然、学部か学科の関係者のみに利用が制限され、入手可能性は最大でも機関全体までに限られる。多数の回答者が、学科または個人のウェブサイトを通じて公開していると回答した。ほとんどの場合、後者の方がオープンで、より広い層が利用できる。

4. リポジトリの利用状況

このセクションでは、利用可能なリポジトリの種類、それらの認知度と利用度に注目した。また、リポジトリとしてどのようなタイプのコンテンツを含むと便利かをたずねた。

4.1 分析

表 8：Q3. 「学習オブジェクト・リポジトリ」（または教育資料のデータベース）に関するあなたの経験にあてはまる欄にチェックを入れてください

	聞いたことがある (%)	そこから教育資料をダウンロードした (聞いたことがある人の%)	そこに教育資料を寄稿した (聞いたことがある人の%)	今後も利用する (聞いたことがある人の%)	今度見てみる
国内/国際総合リポジトリ					
JORUM	25.1	13.0	5.6	17.6	26.7
MERLOT	17.9	37.7	0.9	17.6	27.7
全国主題リポジトリ					
EEVL: Internet Guide to Engineering, Maths and Computing	18.8	29.6	2.5	14.8	13.3
Higher Education Academy Engineering Subject Centre Resource database	16.3	37.1	10.0	17.1	12.8
UK Centre for Materials Education	9.1	25.6	7.7	12.8	17.0
地域リポジトリ					
Yorkshire and Humberside Learning Repository	4.4	10.5	21.1	10.5	19.8
Object Warehouse for Learning (North East)	3.0	0.0	7.7	0.0	19.5
その他のリポジトリ					
BUFVC - Moving Image Gateway	19.5	29.8	1.2	17.9	19.3
TRILT - Television and Radio Index for L&T	15.1	29.2	1.5	13.8	23.3
BBC Motion Gallery	15.1	29.2	1.5	13.8	23.3
その他 (下に記入してください)	7.0	93.3	43.3	43.3	3.3

表 8 は選んだリポジトリに関する学術分野での認知度を表す。最も知名度が高かったのは JORUM (25.1%) と MERLOT (17.9%) だった。JORUM は比較的最近のイニシアティブで、まもなく全面的なサービスが開始されることになっていることから、現在かなり話題にな

っている。その知名度の高さは、ある程度それで説明できる。MERLOT は 1997 年から使われており、HE の学部と学生に資料を提供している。MERLOT 中の教育資料には誰でもアクセスできるが、そこへ資料を追加するにはメンバーにならなければならない。エンジニアリング分野からの回答数は他の学部よりも低かったが、EEVL: Internet Guide to Engineering, Maths and Computing (18.8%)、HEA Engineering Subject Centre Resource database (16.3%) はよく知られていた。ただし、EEVL は長年利用されており、エンジニアリング以外の分野の資料も扱っている。

これらのリポジトリの認知度（「聞いたことがある」）、ダウンロード（「そこから教育資料をダウンロードした」）、デポジット（「そこに教育資料を寄稿した」）の間には差がある。リポジトリについて聞いたことがあるとしても、必ずしも教育資料をそこからダウンロードしたり、そこに寄稿したりするわけではない。例えば EEVL の場合、81 人(18.8%) がそれについて聞いたことがあったが、そこから教育資料をダウンロードしたのは 24 人 (29.6%) で、そこに寄稿したことがあると報告した人はさらに少なく、2 人 (10.5%) だった。ダウンロード（「そこから教育資料をダウンロードした」）と再利用（「今後も利用する」）の差は、それほど顕著ではなかった。概して、ここに掲載したリポジトリ全部について、寄稿レベルは低かった。回答者に新しいリポジトリを紹介した結果、高い比率で関心が寄せられたことは期待が持てる。リポジトリを「今度見てみる」という意志を表明した回答者の比率が、「聞いたことがある」という回答の比率よりも高い例が多い。

表 9：Q3. 他のリポジトリ

保管場所オプション	数	比率
高等教育学術団体	23	21.5%
主題リポジトリ	39	36.4%
VLE／専用	4	3.7%
総合リポジトリ	15	14.0%
マルチメディア集	19	17.8%
その他	47	43.9%
合計	147	

注：（回答者 107 人中の%）

合計 107 人 (24.9%) が「その他」の回答欄に記入した（表 9）。高等教育学術団体のリポジトリの比率が高く、回答数は 23 だった。MIT OpenCourseWare (<http://ocw.mit.edu/index.html>)、BizED (<http://www.bized.ac.uk/>)、FERL (<http://ferl.becta.org.uk/>)、出版社のウェブサイトを挙げた回答者は、それぞれ 4 人だった。SCRAN (<http://www.scran.ac.uk>)と Stòr Cùram (現 Learning Exchange) (<http://www.storcuram.ac.uk>)は、それぞれ 3 人だった。10 人の回答者が、言及されたリポジトリをどれも知らなかった。

表 10：Q4. 以前にリポジトリ中の教育資料をダウンロードまたはブラウズしたことがある場合、システムとその中の教育資料からどのような印象を受けましたか

	強くそう 思う	そう思う	特に意見 はない/ よくわか らない	そう思わ ない	全くそう 思わない
リポジトリの利用					
探していたものを見つけるのにあまり時間がかからなかった	8.1	48.4	14.0	26.9	2.7
リポジトリは簡単に利用できた	17.5	56.7	13.4	18.7	3.7
情報資源へのリンクは全部正確で、まだ有効だった	7.7	36.6	22.4	26.2	7.1
大きなファイルのダウンロードを禁じられた	1.7	6.6	36.5	38.1	17.1
持っているソフトウェアと互換性がなかったので、見つけた教育資料を使えなかった	0.6	12.2	24.3	51.4	11.6
コンテンツの品質					
見つけた教育資料の品質は良かった	11.8	57.8	19.3	9.6	1.6
見つけた教育資料は自分の教え方に合っていた	10.4	40.1	30.8	16.5	2.2
総合的なリポジトリよりも主題リポジトリを使えば良かったと思う	19.2	39.0	29.7	8.8	3.3
査読付き教育資料があればもっと役に立ったと思う	13.6	38.0	31.5	13.6	3.3
著作権問題					
著作権との関係で教育資料をどのように利用または変更できるかという点がはっきりわかった	7.0	26.9	26.9	31.2	8.6
ダウンロードした後、著者や著作権に関する情報が簡単に見つかった	7.6	29.2	33.0	21.1	9.2
期待を満たしたか					
同じ専門分野で活動している他の機関の同業者を見つけるために役立つことがわかった	3.3	24.6	37.7	25.5	8.7
教育資料に簡単にアクセスできるので仕事量が減った	15.4	21.1	29.2	36.8	7.6
役立つ情報資源に関する他のユーザーのコメントが有益だった	3.3	23.8	50.8	17.1	5.0
リポジトリを使いたくない	2.9	3.5	16.4	43.9	33.3

以下の分析は、最初 2 つの回答カテゴリー（「強く思う」と「思う」）、最後 2 つの回答カテゴリー（「そう思わない」と「全くそう思わない」）を、それぞれ 1 つにまとめて行った。これらの設問に対する回答数は 171 から 187 の間で、それに従い比率を計算した。

4.1.1 リポジトリの利用

リポジトリの利用に関する感想は、回答者が概して良い経験をしてきたことを示している。特に、使いやすさ（64.2%）と教育資料を見つけるために要する時間（56.5%）に対する回答に、その点がよく反映されている。半数以上（55.2%）が大きなファイルのダウンロードを禁じられておらず、自分のソフトウェアと互換性がないため、教育資料を読み込んだ後で使えなかったという項目に対しては、「そう思わない」と「全くそう思わない」を合わせると 63.0%だった。リンクが正確で、まだ有効だったという項目に対しては、思う（44.3%）とそう思わない（33.3%）の間に、意見がほぼ二分した。

4.1.2 コンテンツの品質

回答者の感想で多かったのは、見つけた教育資料の「品質が良かった」（69.5%）と「自分の教え方に合っていた」（50.5%）である。これは教育資料が学術関係者によってうまく再利用されていることを示す数字と考えられる。回答者の 58.2%が、主題リポジトリの方が良いという意見だった。これは目的のテーマに関係のある内容を確実に得られるためであろう。また、主題リポジトリの方が教育資料探しに要する時間も短縮されることが推測でき、この点は調査票の自由記入欄に書かれた回答にも反映されている。教育資料の品質は良かったが、査読の必要性も表明された（51.6%）。Q10（6.1 を参照）では、そのプロセスについて考えられるレベルと形式を示している。他の設問に対する言及も、査読の重要性を示している。21 人が、リポジトリに教育資料を寄稿しない理由として、質の低い教育資料と自分の教育資料を関連づけられたくないから、と回答した（表 17）。また、専門家パネルが教育資料を検討し、品質を保証するなら、将来リポジトリに寄稿する見込みが「はるかに高くなる」または「高くなる」という意見が示された（58.4%）。

4.1.3 著作権問題

他人の教育資料にアクセスする 1 つの理由が、その教育資料の一部を改変し、自分の教育資料として使うことである。従って、著作権を明示的に表示できることは不可欠である。リポジトリを利用した経験がある回答者の 39.8%が、著作権に関するガイドラインの中で、教育資料を利用または変更する方法が明瞭に示されていないと答えた。教育資料をダウンロードした後については、著者と著作権情報の詳細が簡単に見つかったという回答の比率は（36.8%）、その情報へのアクセスが難しかったという回答（30.3%）よりもわずかに高かった。

4.1.4 期待を満たしたか

結果では、リポジトリの利用に満足していることが明確に示された。リポジトリの利用によって仕事量が減る傾向はあまり見られず、そう思うという回答が 26.5%しかなかったのに対し、そう思わないという回答は 44.3%だった。同じ分野の仲間を見つけるためにリポジトリが役立つことがわかったという回答は 27.9%だった。27.1%は、文献に関する他の人たちのコメントが役立ったと回答した。

合計 35 人から、リポジトリを使いたくない理由が 41 件挙げられた。例えば、それらに保管される教育資料の品質、再利用、役立つものが見つからないなどの問題からリポジトリ・システムの使い勝手の問題、時間がないなど、さまざまだった（表 11）。

表 11：Q4. リポジトリを使いたくない場合は、その理由を記入してください。

理由	数	比率
教育資料の問題	9	25.7
使い勝手の問題	7	20.0
知らない／よく知らない	7	20.0
必要ない／関心がない	4	11.4
その他／不適用	4	11.4
時間がない	3	8.6
知的所有権	3	8.6
一般化できない	4	11.4
合計	41	

注：（回答者 35 人中の%）

自分にとってリポジトリは新しい概念であり、その潜在機能を十分調べるために時間が必要だ、という意見が一部の回答者から出た。ある回答者は、これらの教育資料が大学にとって貴重な資産であり、他人に無料で配布すべきではないと感じていた。別の回答者はそれとは逆に、「完全にオープンなリポジトリにしか関心がない」という意見だった。ある回答者は、機材が足りないという点と、学生にやる気を起こさせることが難しいという点を挙げ、「授業でデータ・プロジェクターを使えないことがあり、学生にこれらの資料を自宅で学習するように促すことは難しい」と指摘した。リポジトリ中の教育資料に関し、数名が興味深いコメントを寄せている。「これまで、自分の教える内容に特にあてはまるものが何も見つかっていない」、「そこにある教育資料は決まって質が低い」、「ウェブやオンライン・ジャーナルで入手できないもので役立つ教育資料が入っているリポジトリがまだ見つからない」、「むしろ自分で考え抜き、合理的に説明でき、理論的に弁護できる教育資料を自分で作成したい」などである。ある回答者は、リポジトリが「複雑すぎるワンストップショップの方がいいーグーグルのような」という意見だった。同じく、「現

行のリポジトリ技術が未熟」という意見もあった。3人が、想定するリポジトリに従い回答が変わってくるので、この設問には回答できないと感じていた。

表 12：理想的な教育資料リポジトリがあるとすれば、どのようなコンテンツが役立つと思いますか

役立つコンテンツのタイプ	数	比率
写真、画像、図、動画	361	84.0
テキスト中心の情報－講義原稿や用例	306	71.2
外部サイトへのリンク（専門分野または技術に関係するもの）	294	68.4
専門分野における模範的な指導実践（例えば教授法、教材例、評価法）を取り上げたケーススタディーまたは論文	293	68.1
革新的な教育・学習方法の模範例	279	64.9
具体的な学習効果を明示した教材パッケージ－学習単位に対応	257	59.8
コンピュータ支援学習 (CAL) ソフトウェア（分野別）	228	53.0
参考書リスト（分野別）	239	55.6
学習者の管理または監督方法の模範例	148	34.4
その他	28	6.5

全体的に、示唆したコンテンツ全部について数値が高く、中でも最も高かったのは「写真、画像、図、動画」（84.0%）だった。この分野は「その他」として挙げられたものの中でも比率が高かった。「その他」という選択肢を選択した回答者は28人しかいなかったが、リポジトリのコンテンツとして役立つものに関し、37人が追加情報を記入した。大まかな分類を表13に掲載した。要求された具体的コンテンツとしては、マルチメディア、小テスト、試験問題・解答などが挙げられた。修正可能な形の分量が少なめにまとまっているコンテンツが好まれた。ある回答者は、「利点の1つは、何を見ても対応できる心構えを持つことによりアイデアが得られること」とコメントした。

表 13：Q5. その他

役立つコンテンツ	数	比率
指導に組み込める資料	14	37.8
教育・学習プロセスを伝える資料	12	32.4
評価に関係する資料	12	32.4
資料のフォーマットに関する具体的な期待	4	10.8
わからない	3	8.1
合計	45	

注：（回答者37人の%）

4.2 考察

各リポジトリに関し、教育資料をダウンロードしたことがある回答者の比率の方が、リポジトリに教育資料を寄稿したことがある比率よりも高かったことは予想できた。追加されたコメントから判断して、HEA がよく使われているようだが、主に資料データベースまたは HEA が管理するウェブサイトの形での利用だった。それらは特定のテーマについて大量の情報にアクセスするために有効な方法であり、その分野内の他の資料に対するリンクも提供されている。設問 4 から、総合的リポジトリよりも主題リポジトリの方が良いという項目に対し、多数の回答者が「強くそう思う」または「そう思う」と回答した。これを HEA が教育界で定評ある組織としての地位を確立していることと考え合わせると、それらが成功している理由の一端を説明できる。どのようにリポジトリのことを耳にしたか、またはリポジトリと出会ったか、そして何に対して興味を持ったのかを調べるためのさらなる調査を実施することも可能である。それは新しいリポジトリについて知らせるため、または既存のリポジトリに対する関心／認知度を高めるために、可能な限り最善の手法を見つけるために役立つ。

このセクションでは、多数の回答者がリポジトリを利用する意志があり、リポジトリに対して否定的意見の比率は低いという点も指摘された。これはリポジトリにとって好意的な人が実際にそれらを使っているという意味ではない。前のセクションの結果から、そうではないことは明らかである。現にこのセクションでも、リポジトリからの教育資料のダウンロードと教育資料の寄稿を人々が望まない潜在的根拠として、それらを見つけるために要する時間と著作権をめぐる懸念が明らかになった。ほとんどの場合にリポジトリを使いたくないと回答した 35 人の回答者が挙げた理由は、前述のような障壁であり、リポジトリや共有自体に反対しているわけではない。リポジトリは必要ないか、またはそれに関心がないと答えた回答者は 4 人だけだった。従って、時間の不足、著作権、利便性の悪さなどの障壁が、リポジトリを使わない主な理由と言える。

回答者が役立つと思う教育資料を見ると、彼らが想定するリポジトリの目的に明瞭な違いがあった。指導に組み込めるようなものを想定する回答者と、学習プロセスに関する情報を伝えることを想定した回答者がいた。役立つと思われる教育資料のバラエティは豊富で、各回答者が平均 5.6 件の資料を選択した。これにより、多くの回答者が、あらゆるものを何もかも入手することをリポジトリの目的と考えていることが明らかになった。リポジトリを利用する目的が異なるため、リポジトリが利用されるかどうかは、リポジトリの用途として想定しているものに依存する。

5. リポジトリへの寄稿の現状

次の設問群で、教育資料のリポジトリへの寄稿レベルを測った。また、なぜ自分の資料を提供するのかという動機と、リポジトリへの寄稿を思いとどませる要因に関する重要な質問もした。

5.1 分析

表 14：Q6a.教育資料をリポジトリに入れたことがある場合、最も多く寄稿したリポジトリはどれですか

リポジトリのタイプ	数	比率
学科内	63	37.3
機関内	55	32.5
全国（主題）	32	18.9
全国（総合）	17	10.1
地域（総合）	1	0.6
地域（主題）	1	0.6
合計	169	100.0

回答者の3分の1以上が（38.8%）教育資料リポジトリに寄稿したことがあり、その中で過半数が学科内（37.3%）、機関内（32.5%）、または全国的なリポジトリに寄稿していた。地域別リポジトリへの寄稿はほとんど報告されなかった。現時点では利用可能な地域リポジトリが少ないということで、これは説明できる。

表 15：6b. このリポジトリを選ぶ主な理由に関し、該当する基準にチェックを入れてください

リポジトリに寄稿する理由	数	比率
指導方法を改善するため	86	51.2
学生にやる気を起こさせるため	81	48.2
教育資料が確実に保存されるようにするため	57	33.9
所属機関の VLE（バーチャル学習環境）とリンクしている	56	33.3
自分の研究に関係している	52	31.0
そこで見つけた教育資料が役立ったという良い経験があるので、自分も寄稿する義務があると感じた	36	21.4
所属機関外で専門分野内の有益な交流の機会になる	30	17.9
同僚が寄稿している	29	17.3
所属機関内での評価が上がる	28	16.7
所属する学科または機関で義務づけられている	22	13.1
他の英国高等教育(HE)機関からの評価が上がる	21	12.5
業界内で評価が上がる	10	6.0
経済的報酬から利益を得るため	5	3.0
その他	27	16.1

リポジトリに寄稿する主な理由または動機はさまざまだった。かなり高い比率の回答者が（51.2%）、自分の指導方法を改善するために寄稿する。同様に、学生にやる気を起こさせる（48.2%）ことも、寄稿の重要な理由とみなされていた。一部の学科や機関では（13.1%）、寄稿が義務づけられているという興味深い回答が得られた。回答者の 3 分の 1（33.3%）は、リポジトリが所属機関の VLE とリンクされていたので寄稿したと回答し、リポジトリを既存のシステムや方法に組み込むと寄稿が増えることが実証された。これは VLE を介したリポジトリへの寄稿が簡単であることと関係するかもしれない。39 人が 42 件の追加コメントを記入したが、「その他」を選択したのは合計 27 人だった。デポジットの理由として最も多かったコメントは、例えば「学生の学習を支援する一離れた場所からのフレキシブルなアクセス—再利用可能性」など、学生のために資料へのアクセスを強化することだった。他には、「尊敬と公平という考え方から仲間にお返しをしたかった。義務だとは感じなかった」など、個人的または利他的な理由も挙げられた。回答者 6 人中 5 人が、職場からの要請またはリポジトリを支援する立場にあるという理由を挙げた。

表 16：Q6b. その他

その他の寄稿理由	数	比率
学生のアクセス強化	11	28.2
個人的成長／個人的感謝／利他的理由	11	28.2
職場からの要請	5	12.8
他人のためのアクセス強化	5	12.8
経営／管理／コスト／時間的な利点	3	7.7
仲間／機関からの圧力	2	5.1
特定リポジトリの名声／品質	2	5.1
その他／無関係な否定的コメント	3	7.7
合計	42	

注：（回答者 39 人中の％）

表 17：Q7. リポジトリに教育資料を寄稿したことがない場合は、寄稿しない主な理由を挙げてください

リポジトリに寄稿しない理由	数	比率
リポジトリを 1 つも知らない	123	43.0
所属機関外の人と共有するための正しいフォーマットで教育資料を作成する時間がない	89	31.1
自分の教育資料は VLE に入っている	80	28.0
教育資料を寄稿する時間がない	79	27.6
自分の教育資料は自分自身のウェブサイトに入っている	69	24.1
それは自分の知的財産であると感じており、自分で管理したい	59	20.6
将来も教育資料に自分の名前が残ることに自信を持ってない	49	17.1
特定の集団のみが自分の教育資料を使えるようにしたい	40	14.0
他人に自分の教育資料を改変されたくない	29	10.1
自分の指導にはさまざまな教育資料を必要とし、一つ一つを切り離して個別に扱うことができない	27	9.4
自分の教育資料が質の低い他の資料と関連づけられることを避けたい	21	7.3
他人に自分の教育資料を使われたくない	16	5.6
正しいフォーマットで教育資料を作成するための適切なソフトウェアを持っていない	11	3.8
資料のアップロードに時間がかかりすぎる	6	2.1
所属機関が寄稿を許可しない	5	1.7
その他	50	17.5

このセクションは 286 人（66.5%）の回答者からの回答を元に計算した。前の設問同様、リポジトリに寄稿しない理由を記録した。寄稿しない最大の理由は、リポジトリを 1 つも知らないことだった（43.0%）。正しいフォーマットで教育資料を準備する時間がないという回答者は 31.1%、寄稿する時間がないという回答者は 27.6%だった。自由記入欄でのこれに対する追加説明では、自分の教育資料が正式な状態ではない、または不完全でリポジトリに寄稿できないと回答者は感じていた。教育資料が様々な場所（VLE、個人ウェブサイトなど）に保管されているので、それらをリポジトリに寄稿したくないという回答もあった。

75 人が、リポジトリに寄稿しないそれら以外の理由を記入した。その一部を挙げる。主なものとして個人的要因がある。時間がない、この件について知識／認識がない、自分の教育資料に自信が持てない、他人がそれを欲しがると認識していない、などである。例えば、ある回答者は「幅広い層の人たちがそれを欲しがると考えもしなかった」とコメントし、別の回答者は「自分の教育資料が役立つという自信が持てない」とコメントした。組織内での要因も言及された。例えば、学科にそのような方針がない、誰からも寄稿を要請されたことがない、サポートが得られない、これまで機会がなかった、などである。教育資料の使用される状況も共通するテーマだった。例えば、「自分の教育資料は講義と組み合わせた形でしか理解できないことが多い」、「自分の教授方法は自分には合っているが、誰にでも合うとは思えない」、などの意見が記録された。自分の教育資料に適したリポジトリを知らない、どのような人が教育資料をダウンロードするのか知りたい、査読制度を設置する必要がある、などの回答もあった。ある回答者は、リポジトリ・システムの成熟度に関する懸念を表明し、「リポジトリは最新技術のためのプロジェクトではなく、目的にも合うものでなければならない」と記した。回答者の所有物ではないため寄稿できず、保管できない、または所有権の帰属があいまいな教育資料に関する著作権の問題も言及された。そのすべてを集約するコメントとして、「知的財産権(IPR)がまだ不明で、教育資料に対して広い層がアクセス可能か、将来の商品化または出版権に影響を与えるかどうかを判断することが難しい」という意見があった。現在、別の配信方法によって教育資料が広く利用できるようになってきているという事実を指摘したコメントもいくつかあった。それは自分の学生に対しては、「これらは CD で学生に配布する」、「教育資料は自分の学生に電子的方法で配布する」という形で、より広いアクセスは、「ソフトウェア・ライセンスを通じて配布することや要望に応じて配布することがある」という形で行われる。

表 18：Q7. その他

その他のリポジトリに寄稿しない理由	数	比率
個人的な要因	23	30.7
組織内の要因	13	17.3
教育資料を作成しない	12	16.0
教育資料の使用される状況	9	12.0
リポジトリに関する問題	8	10.7
IPR／著作権に関する問題	8	10.7
他の方法で入手できる	8	10.7
まだ寄稿しないー将来は寄稿を意図している	5	6.7
合計	86	

注：（回答者 75 人中の％）

5.2 考察

以前にリポジトリから教育資料をダウンロードしたことがあるか、または寄稿したことがある回答者の 3 分の 2 以上が、学科または機関のリポジトリからそれを行っていた。ここでもまた、教育資料を外部に対して配布する人と比べ、機関内で教育資料を配布する人の比率が高いことが示された。理想のリポジトリであれば教育資料を寄稿する準備があると理由を調べた結果、多種多様な個人的ならびに利他的理由を優先する顕著な傾向が見られた。個人的要因が最も多く、寄稿することによって得られる利益が重要であることを実証した。以前にリポジトリに寄稿したことがある人の 3 分の 1 以上が、自分の教育資料をきちんと保存したいという目的で寄稿しており、教育資料を安全な環境に確実に収納したいと回答者が考えていることが判明した。これは被雇用者が組織に代わって資産を保存することを意味するため、機関にとって有益である。

学術分野での勤務経験が 15 年を超える回答者は、経験年数の短い回答者ほどには、自分の評価が上がることを重視していない（表 19）。15 年を超える経験を持つ回答者の場合、特定分野ですでに地位を確立しているので、この点をあまり重視しないものと思われる。

表 19：「Q1d 学術分野での勤務年数を選んでください」と「Q6b 所属機関内で評価が上がる」のクロス集計

	Q6b 所属機関内で評価が上がる		合計数
	0	1	
5 年未満	29	6	35 (17.1%)
6～10 年	35	6	41 (14.6%)
11～15 年	35	6	41 (14.6%)
15 年超	57	9	66 (13.6%)
合計	156	27	183

注：1 人の回答者が Q6b には回答したが、Q1d には回答しなかった。回答者は両方に答える必要があるため、このクロス集計は 28 人中ではなく 27 人中の数字である。

寄稿しない理由の中で、リポジトリを知らないことが大きな障壁になっていた。潜在的な寄稿者がいたとしても、リポジトリの存在に気づいていなければ寄稿は不可能なので、これはもっともな結果である。ここでも時間という問題が、これまでリポジトリに寄稿できなかった理由の 1 つに挙げられた。

6. リポジトリへの将来の寄稿

このセクションの目的は、将来、回答者が喜んで寄稿したいと思うようなりポジトリに関する情報を集め、教育資料にアクセスする権利とデポジットに対する経済的・非経済的報酬に注目することだった。まず、前のセクションで言及された障壁を克服するために役立つ動機を見つけることから始めた。

6.1 分析

表 20：Q8a. 教育資料を最も喜んで寄稿したいと思うリポジトリの種類

リポジトリのタイプ	数	比率
全国（主題）	212	49.3
全国（総合）	77	17.9
機関内	69	16.0
学科内	40	9.3
地域（総合）	17	4.0
地域（主題）	3	0.7

全国リポジトリが最も好まれるタイプで、回答者の 3 分の 2 以上（67.2%）がこの選択肢を選択した。機関（16.0%）または学科（9.3%）内であれば喜んで寄稿する回答者が少数なの

は明らかである。どのような種類であれ、地域リポジトリに喜んで寄稿する人はわずか 4.7% だった。自分の機関内（25.3%）よりも機関外（71.9%）のリポジトリに喜んで寄稿する人の方が多いのは興味深い点である。全国と地域のリポジトリについては、総合リポジトリよりも主題リポジトリの方が好まれた。

表 21 は回答者が「理想の」リポジトリに進んで与えようとするアクセス権を示したものである。約 3 分の 1 が登録ユーザーに対してパスワード・アクセス権を、31.4%がオープンアクセス権を、22.6%が資料ごとに異なるアクセス権を与えると回答した。それらよりも若干不人気だった選択肢は、学生だけに限定する（7.0%）、学科内（5.1%）または学部内（2.6%）に限定する、だった。上の設問との関連で、機関または学科になら喜んで寄稿すると回答した人々と同程度の人数が、自分の機関、学科、学部にアクセス権を限定したいと回答した。

表 21：Q8b. その教育資料リポジトリのアクセスのタイプ

アクセス	合計	比率
登録ユーザーによるパスワード・アクセス権	142	33.0
誰に対してもオープンアクセス	135	31.4
教育資料ごとにアクセス条件を変える	97	22.6
UKHE のメンバーに限定したパスワード・アクセス	71	16.5
UKHE のメンバーに限定したオープンアクセス	62	14.4
所属機関内のユーザーに限定	49	11.4
自分の学生に限定	30	7.0
所属学科内のユーザーに限定	22	5.1
所属学部内のユーザーに限定	11	2.6
その他	12	2.8

表 22 は「その他」に関するコメントを記入した回答者 19 人からの回答である。

表 22：Q8b. その他

他のタイプのアクセス	合計	比率
ユーザーによって変わる	7	36.8
著作権／IPR／ライセンスの内容に従い変わる	6	31.5
有料アクセス	3	15.7
コンテンツのタイプによって変わる	2	10.5
学生以外	2	10.5
パスワード登録アクセス	2	10.5
国際アクセス	1	5.2
設問に答えない	1	5.2
合計	24	

注：（回答者 19 人中の%）

追加コメントを記入した回答者の過半数が、アクセス権を一定に設定しないと回答した。著作権と IPR の問題が頻繁に言及されたことから、回答者は教育資料の悪用をおそれていることがわかる。有料アクセスも言及され、1 人の回答者は「控え目な料金を設定し、その一部を」受け取りたいと記した。最も多かったコメントは、理想のリポジトリに対するアクセス権はユーザーのタイプによって変え、個別のユーザーに対してそれぞれ異なるアクセス権を与えるようにする、というものだった。

表 23：Q9. 理想のリポジトリに最も進んで寄稿したいと思うのはどのようなタイプの教育資料ですか

教育資料	合計	比率
テキスト中心の情報	304	70.7
参考書リスト	212	49.3
写真、画像、図、動画	204	47.4
外部サイトへのリンク	180	41.9
ケーススタディー	164	38.1
教育資料集	154	35.8
革新的教育の模範例	139	32.3
CAL ソフトウェア	78	18.1
学習者管理の模範例	74	17.2
その他	30	7.0

理想のリポジトリに進んで提供したいと回答者が考える教育資料のタイプに関する設問で

は、人気のある教育資料のタイプが多数挙げられた。例えばテキスト資料（70.7%）、参考書リスト（49.3%）、写真・画像・図・動画（47.4%）、外部サイトへのリンク（41.9%）、ケーススタディー（38.1%）などである。最も少なかったのはCALソフトウェア（18.1%）と学習者管理の模範例（17.2%）だった。ただし、テキスト資料などの教育資料と比べると、このようなタイプの教育資料はそもそも数が少なく、ここの数字はそれを反映している。

表 24：Q9. その他

その他の教育資料	合計	比率
指導に組み込む資料	14	33.3
教育・学習プロセスを伝えるための資料	8	19.0
評価に関係する資料	6	14.2
リポジトリを使いたくない／わからない	5	11.9
状況による	4	9.5
資料のフォーマット／品質に関する具体的期待	2	4.7
研究に関係するあいえよう	2	4.7
テーマからはずれたコメント	4	9.5
合計	45	

注：（回答者 42 人中の%）

42 人の回答者がコメントを追加し、ここでも理想的リポジトリの目的について回答者の間で受け取り方に違いがあることが明らかになった。頻度の高かったコメントは、指導に組み込める資料（33.3%）と、教育・学習プロセスを伝えるための資料（19.0%）だった。後者の例は職員育成のための教育学的資料である。

表 25：Q10. 理想のリポジトリでは、どのようなタイプの査読または品質管理の仕組みを期待しますか

査読基準	合計	比率
ユーザーがコメントと評価を追加	253	58.8
専門内容の査読	245	57.0
技術・法律上の審査	235	54.7
査読後に不採録になる可能性	173	40.2
品質の明示	172	40.0
指導方法の審査	131	30.5
何でも受け入れる	52	12.1

理想のリポジトリに導入したい査読または品質管理の仕組みに関する設問では、半数以上

がユーザーによるコメントと評価を可能にする（58.8%）ことと、専門内容の査読（57.0%）と技術・法律上の審査（54.7%）を実施することを希望した。回答者の過半数が、何らかの品質管理機構に賛同しており、理想のリポジトリでは何でも受け入れることを希望する人は12.1%にとどまった。

表 26：Q11. 今後のリポジトリへの寄稿を考えた場合、以下の理由は寄稿を促す動機としてどの程度の影響力を持ちますか

理由	非常に強い	強い	どちらとも言えない	弱い	非常に弱い
無料で簡単にサポートが得られる	40.9	39.8	11.9	2.8	0.2
一度デポジットしてしまえば、リンクの保守を行う必要がない	35.8	35.3	17.9	4.4	0.7
所属学科がそれを義務づけた	34.2	23.0	17.7	10.7	7.4
所属機関がそれを義務づけた	33.7	24.4	17.9	9.5	8.6
経済的報酬のために必要	32.1	30.0	17.9	9.5	4.4
情報資源を管理し、保存するために役立つ	29.3	42.8	17.0	4.2	0.5
教育だけでなく研究とも関係する	26.3	41.4	19.3	5.8	1.9
教育資料に対する自分の著作権を明示する機会	25.1	25.1	27.4	12.1	4.0
昇進のために必要	24.9	29.3	21.9	12.8	5.1
全国的に認められる	24.9	33.3	23.0	9.8	2.3
所属機関内で認められる	21.6	38.4	21.6	8.1	2.3
専門分野の権威が寄稿している	20.0	36.5	24.7	10.7	2.6
専門家パネルによる査読	18.6	39.8	25.6	7.4	4.2
専門分野の研究者の大半が寄稿	18.6	42.3	21.9	8.8	2.1
全国優秀教育者賞の審査基準	16.5	24.4	32.6	14.0	5.3
地域内で認められる	15.3	30.2	29.8	12.6	2.6
教育資料が他のユーザーの評価を受ける	14.0	35.8	33.0	7.7	4.2

表 26 は今後、教育資料の寄稿を促す動機としてある程度影響力が強い理由を調べた結果である。他のどの理由よりも多くの回答者に教育資料の寄稿を促す理由として挙げられたのは、無料で簡単にサポートが得られる（40.9%）ことだった。意外なことに、学科（34.2%）または機関（33.7%）のどちらかにより寄稿が義務づけられることも、寄稿を促す強力な影

響力を持つ理由だった。ただし、これらの要因については「非常に弱い」と回答した率でも最高値を獲得している。一覧に示したすべての要因について半数以上の回答者が、今後のリポジトリへの寄稿を促す「非常に強い」か「強い」影響力を持つと回答したことから、将来のリポジトリへの寄稿に関し、多種多様な理由があることがわかる。

表 27 は一定数の人々にとり寄稿する動機となる経済的・非経済的報酬を示したものである。

表 27：Q12a. リポジトリへの寄稿に対して報酬を得られるとした場合、以下の例の中で寄稿する意欲を引き出す効果が最もあるのはどれですか

報酬／インセンティブ	絶対に寄稿する気になる	寄稿を考慮する気になる	何も効果がない
経済的報酬			
昇給の候補に推薦	44.9	33.5	15.1
一時金報酬の候補に推薦	36.3	39.3	16.5
印税：例えばダウンロード 1 件あたり	27.2	39.1	27.0
ギフト：例えば書籍、商品券	15.3	40.5	35.3
特典：例えばスポーツクラブの会員資格	9.5	24.4	57.2
非経済的報酬			
教育・学習プロジェクトへの予算配分	29.5	43.7	20.2
貢献できたという満足感	29.1	46.3	18.8
研究室機材購入のための予算配分	28.1	42.8	22.6
専門分野の研究のための休職期間	23.7	39.5	28.1
教育的研究を行う可能性	21.9	31.6	39.8
オープンアクセス・リポジトリについて外部の認識が高まる	20.2	40.2	30.9
学科長に認められる	13.7	41.4	36.7
学内優秀教育者賞の候補に推薦	10.7	42.8	37.9
大学内出版物への論文掲載	6.7	27.7	57.0

昇給（44.9%）と一時金報酬（36.3%）の候補に推薦されることが、絶対に寄稿する意欲を引き出す報酬の中で最も多かった回答である。貢献したという満足感（29.1%）をあげた人も多く、教育資料の提供について利他的な態度を示す回答者の存在がうかがわれる。組織内部での報酬はあまり重視されておらず、学科長に認められることはリポジトリへの寄稿の動機として「何も効果がない」という回答が 36.7%に上った。同様に、37.9%が学内優秀教育者賞の候補に推薦されることは「何も効果がない」と回答した。学内出版物への論文

掲載は最も人気のない報酬で、57.0%がリポジトリへの寄稿意欲に対して「何も効果がない」と回答した。

表 28：Q12b. ほかに効果のある要因があれば記入してください

他の誘因	合計	比率
業務／職務に関係する要因	26	42.6
リポジトリに関係する要因	23	37.7
個人的要因	19	31.1
他の人に役立つ（利他的）	10	16.4
学生に役立つ	9	14.8
自分の指導に役立つ	5	8.2
やる気をなくさせることに関係する否定的コメント	3	4.9
合計	95	

注：（回答者 61 人中の%）

61 人の回答者が 95 件の追加コメントを寄せた。その中で最も多かったのが業務に関係する要因だった（42.6%）。例えば、それを行うための時間配分を増やすことや、同じ目的を持つ同僚と共同作業を行う機会が得られることなどである。他に言及された誘因としては、権利意識の改善やギブアンドテイクの機会など、リポジトリと共有に関係するものがあった（37.7%）。個人的要因（31.1%）は、主にプロ意識と個人的満足感に基づくものが多く、一部からは学生に役立つ（14.8%）ことが誘因になるというコメントもあった。これはリポジトリへの寄稿を促す多数の誘因があることを意味する。その一部は経済的報酬や満足感などの個人的要因であり、一部は同僚や学生などの他人に役立つ要因だった。

6.2 考察

主題リポジトリは、多数の研究科目に属する大量の資料が保管されるリポジトリよりも、関連資料を見つけやすいという理由から、ユーザーの間で人気があるように思える。ある回答者は「品質の高いものすべて」を寄稿したいが、良質な講義用スライドセットと外部サイトへのリンクを含む WORD 文書では違いがあると記した。このように、理想のリポジトリの公式または非公式な使い方に関し、回答者の間に異なる考え方があることは明らかである。

リポジトリへの寄稿を促すのはどのような種類の報酬かという設問では、全般的に非経済的な報酬よりも経済的報酬の方を好む傾向が強く、それは驚くにはあたらないという意見があった。ただし、経済的であれ非経済的であれ、回答者に寄稿を考慮させる効果を持つ報酬の種類は多い。

リポジトリに寄稿する理由はリポジトリの目的に関する認識と結びついており、教育資料を保存するために寄稿する人もいれば、教育資料の著作権を明示する機会とみなす人もいる。教育資料を他人が見られるようにすることで、全国的に、また機関内で認められたいという回答者もいる。ある分野の同僚研究者や指導的立場の人が寄稿していることが、将来の寄稿に影響することも明らかだった。これは今回の調査全体を通じて何度も示された現象である。

利用者からフィードバックを受け取り、教育資料を修正／改善できるという意味で、または単に仲間から認められるという意味で、ユーザーのコメントは寄稿者にとって貴重な要素と受け取られている。教育資料をダウンロードする前にその資料に対して寄せられたコメントを見ることを他のユーザーに許可することも可能である。これで特定の教育資料を見つける時間を短縮できるとも考えられる。

7. 教育資料に付随する権利

7.1 分析

表 29：Q13. あなたの所属機関では教育資料の著作権を誰が所有していますか

	合計	比率
わからない	236	54.9
機関が著作権を持つ	112	26.0
教員が著作権を持つ	55	12.8
無回答	26	6.0

HE と FE の教員と職員の間で著作権の所有に関する認識が欠けていることは明らかであり、回答者の半数以上 (54.9%) が、教育資料の所有権がどこにあるのかについて曖昧であった。ほとんどの場合、教育資料は業務中に作成されるということから、機関が著作権を所有している。2 人の回答者が指摘したように、一部の大学では、著者と機関が共同で教育資料の所有権を持つ。少数の回答者 (6.0%) はこの設問に回答しなかった。これは彼らも著作権の帰属状況に関してよく知らなかったが、どのような回答を与えることも躊躇したためかもしれない。

表 30：Q14. リポジトリに提出した教育資料に対して他人が行う行為の中で、どれなら許可してもよいと思いますか

	自由に %	制限または条件付きで %	許可しない %
表示	77.7	17.2	0.5
再生	58.8	32.3	3.3
印刷	57.9	36.5	1.4
保存	51.4	36.5	6.7
抜粋	45.1	39.1	8.8
贈与	44.2	39.8	10.2
貸与	39.3	42.8	10.5
複製	36.5	42.1	15.6
集成	35.6	46.5	12.3
注釈	35.1	44.7	13.7
改変	25.6	49.1	19.3
販売	12.3	33.7	47.0

表 30 では、13 種類の行為に関し、回答者が他人にそれを「自由に」行うことを許可する、「制限または条件」付きで許可する、「許可しない」の中から選択された結果を示している。回答者の多くが（77.7%）、教育資料を自由に表示することを許可する意志があり、回答者の半数以上が、それらを自由に再生（12.3%）、印刷（57.9%）、保存（51.4%）することを許可する意志がある。教育資料の注釈（35.1%）、改変（25.6%）、販売（12.3%）を許可しようとする比率は低かった。予想されたことながら、回答者の 47.0%は販売を許可する意志がないが、3 分の 1 以上が制限または条件付きでなら販売を許可すると回答した。これは教育資料の販売による経済的利益の一部または全部を受け取りたいという著者の希望を示唆する結果である。ほとんどの場合、これらの行為に対して制限と条件を付けたいとする回答者の比率は 30～50%だった。これは回答者が教育資料の利用に対して何らかの管理権の保持を希望していることを示唆する。

教育資料に対して回答者が付けようとする制約と条件のタイプに関しては、回答者の 4 分の 3 以上（75.1%）が、寄稿された教育資料の著者名を明記することを希望した。回答者の半数以上（57.7%）は、非営利的または教育的用途のみに限るなど、一定の目的のために教育資料が使用されることを希望した。半数強が（51.2%）機関名の明記を希望した。何も条件を付けずに教育資料の利用を許可する意志のある回答者は少なかった（6.3%）。

表 31：Q15. 教育資料の利用に対してどのような制約または条件を（もしもあれば）設けたいですか

制約／条件	合計	比率
著者名を明記しなければならない	323	75.1
特定の目的に限る	248	57.7
大学名を明記しなければならない	220	51.2
利用のトラッキング	190	44.2
ユーザーは一定の条件に同意しなければならない	187	43.5
ユーザー登録が必要	181	42.1
既存の機密保護機能を維持する	161	37.4
特定集団による利用に限る	128	29.8
写本は原本の正確に同じ複製とする	128	29.8
写本は原本と同じフォーマットとする	102	23.7
制約を設けない	97	22.6
個人的な利用に限る	96	22.3
一定期間しか利用できない	91	21.2
特定地域に制限する	57	13.3
回数を制限する	46	10.7
無条件	27	6.3
その他	18	4.2

27 人の回答者から 33 件のコメントが寄せられ（「その他」を選択した回答者は 18 人しかいないが）、それらを 7 種類に分類した（表 32）。その 4 分の 1 以上が共有に関する全般的な懸念(29.6%)と営利または非営利の用途に(25.9%)関係していた。著者名の明記(22.2%)はここでも言及され、これは上記（表 31）で示された高い比率に連動している。

表 32：Q15. その他

他の制約／条件	合計	比率
共有に関する全般的な懸念	8	29.6
非営利的／営利的用途	7	25.9
原著者名を常に明記	6	22.2
派生版にはそれを明示する印を付ける	5	18.5
使用された権利関係の専門用語の種類	4	14.8
旧資料に関する問題	2	7.4
テーマからはずれたコメント	1	3.7
合計	33	

7.2 考察

このセクションでは、著作権に関する認識が欠けていることが確認された。このことが教育資料の悪用に関する心配の原因になっている可能性がある。回答者は 88 の機関に所属していることから、この認識不足は HE 全体を通じて存在する共通の問題であることがわかる。多くの人が IPR 問題に困惑している現状から見て、支援スタッフによる著作権に関する意識向上のためのワークショップを開催すれば、認識の曖昧な人たちに対して状況を明確にできるという点で有益だと思われる。この調査結果をから、著作権の所有に関する認識不足のレベルは、研究成果物に関して行われた RoMEO (Gadd et. al, 2003) 調査の回答者と同程度であることが分かる。しかし教育資料についてはほとんどの場合は機関が所有者であるため、主に著者と機関という 2 種類の当事者が関与し、著作権所有の状況は研究成果物に比べてはるかに明瞭である。

回答者は、教育資料の変更や他の資料との融合を伴わない表示、印刷、再生などの行為については進んで許可しようとする傾向が強い。回答者の過半数が、教育資料を使うときに一定の制限または条件をユーザーに守らせることにより、教育資料に対して何らかの管理権を維持したいと考えている。多数の回答者にとり重要な条件は、教育資料の著者名を明記することだった。面白いことに、ほとんどの場合、著作権を実際に所有するのは機関であるにもかかわらず、機関名の明示を要求する回答者の方が少なかった。

ユーザーのリポジトリ登録とパスワード・アクセスを望む声が強かった。教育資料の閲覧またはダウンロードを行ったのは誰かを簡単に追跡でき、利用統計という形で寄稿者にフィードバックを返すことができるため、これは納得できる考え方である。リポジトリへの寄稿者と教育資料の利用者との接触を促進することは、両者の協力関係を強化するための良い方法であり、この調査のコメントに何度も登場した点でもある。

8. その他のコメント

このセクションでは回答者に対し、言いたいことがあれば何でも意見を追加する機会を与えた。

8.1 分析

表 33：Q16. あなたの教育資料を利用可能にすることに関し、ほかに何かコメントがあれば記入してください

その他のコメント	合計
リポジトリと共有に関する肯定的コメント	30
細目	
a. 共有	19
b. フィードバック	7
c. リポジトリ	4
所有権の主張	23
細目	
a. 教育資料の所有権／IPR の主張	11
b. 剽窃、著者／責任を明示しない将来の改変または使用に関する心配	13
リポジトリの一定の「仕組み」、「タイプ」、「使用される状況」に関する規定	16
細目	
a. リポジトリの仕組み	11
b. リポジトリのタイプ	3
c. リポジトリの使用される状況	2
教育資料	15
リポジトリと共有に関する否定的コメント	14
教育機関の文化または姿勢／機関の方針／資金調達に関するコメント	13
調査票に関する問い合わせ／懸念	8
リポジトリに関係する問題への支援、知識、意識向上に関する要求	8
寄稿者への潜在的報酬または評価に関するコメント	7
誰がデポジットするか／すべきかに関する意見	3
合計	137

78 人（18.1%）の回答者がコメントを追加した。合計 137 件の意見をテーマ別に分類し、表 33 にまとめた。所有権問題（16.7%）とリポジトリを規定しようとする意見（11.6%）に比べ、リポジトリと共有（21.7%）に関する肯定的コメントを記した回答者の比率の方が高かった。肯定的コメントの一例として、ある回答者は「他人が教育資料を使うことは全く問題と思わないが、修正や改善ができるようにフィードバックをもらいたい」というものだった。別の回答者は「すでに誰かがやったことの重複を避け、仲間と協力し、1 人でできる以上のことを達成したい」と記した。否定的コメントは少なかったが（10.2%）、ある回答者は「『他人に成果を持っていかれる』こと、つまり自分が努力して作成した教育資料を誰かが無料で／努力せずに使い、それによって余裕ができた時間などを使って金銭的報酬

／称賛／昇進などを得ることが気がかりだ」と記した。全般的に、経済的報酬は喜ばしいことであり、自分の教育資料を使って他人が利益を得るなら、その分け前をもらいたいという感覚がある。印税は考慮する価値のあるアイデアだが、実際の導入は難しいのではないかという認識があった。

8.2 考察

設問 1～15 で収集された情報の量から考えると、驚くほど長いコメントを記入した回答者がいる。リポジトリと共有に賛同する回答者の方が反対する回答者よりも多いことは明らかである。これは「リポジトリの利用」セクションの結果に反映され、多数の回答者がリポジトリに賛同していた。ただし、いくつかの障壁の存在により、それらを使うとは限らない。それらの障壁については、この調査全体を通じて回答者から指摘された。例えば著作権に関する懸念、リポジトリの認知度と仕組み、時間不足、誘因（報酬など）、そして同僚の姿勢や機関の方針などの文化的な問題である。

自分の教育資料をリポジトリに入れることに関し、多数の回答者が偽りのない純粋な懸念を表明しているため、否定的なコメントも取り上げ、それと取り組むことが重要である。例えばある回答者は「教育資料作りには時間と労力が必要であり、それらは教育課程と講師に合わせて作ることが多い。そのような教育資料を全国的なリポジトリに入れ、あらゆるユーザーが自由に使えるようにすることで、どのようにその時間と労力を認めてもらえるのか、またはそれに対して報酬を得られるのか、想像できない」と記した。この回答や他のコメントから、回答者がリポジトリへの寄稿の結果として個人的利益を得られると考えていないことは明らかである。現行の方法にリポジトリ・システムを組み込めば、教育資料の寄稿に要する時間を短縮できるかもしれない。このようなアイデアをより広いコミュニティに伝え、リポジトリ・システムやデジタル教育資料の共有を取り巻く思い違いや先入観を取り払うことが必要である。

9. 結論

大部分の人がリポジトリを「良いもの」とみなしているが、リポジトリとは何か、その目的は何か、という点では、多くの人の考えが異なることは明らかである。このため、新しいリポジトリでは、何を達成しようとしているのかを理解可能な言葉で、寄稿者と利用者に対して明確に提示する必要がある。このシステムの利点の概要を明瞭に説明し、高等教育・継続教育の分野でリポジトリと教育資料の共有が必要な根拠を人々が把握できるようにしなければならない。人は他人から変わるように命じられて変わるものではないことを忘れてはならない。個人的な利益や、学習または教育面で他人を助けることができるなど、何らかの根拠が見つかったときに初めて人は変わるのである。

この変化を促進するには、技術をこれまでの方法に合わせる必要がある。技術が従来の慣行を変えると期待してはならない。この技術については技術的困難や使い勝手の問題など、この調査で浮き彫りにされた障壁が存在するため、一部の人のにとっては技術が方法を変えることもあるかもしれないが、大半の人にとってはそれは当てはまらない。1つの解決策は、単純なシステムを作って現行の方法に組み込むことから取りかかり、教員その他の人々を手助けするための支援機構を用意した上で、それらのシステムの利用を拡大してゆくという方法である。

ある回答者は「十分な時間、資金、適切な技能、認知、バックアップサポートなしに、教員が自分だけで、必要とされる基準に合わせ、再利用可能な学習教材を作ることは、事実上不可能だ。重要な点として、それには配置・報酬・昇進という形で認められるような評価・学習・教育に対する新しいアプローチの開発が必要だ」と記した。これは重要なコメントであり、例えば文化的な変容とサポートの改善など、将来、リポジトリを成功させるために必要ないくつかの要素と要員の必要性が、このコメントでは認識されている。サポートはリポジトリという概念を人々に把握させるための1つのステップにすぎないが、情報資源共有のためのリポジトリの成功と失敗を分けるきわめて重要なステップである。HEとFEにおいてリポジトリをごく当たり前な存在にするためには、大がかりな作戦が必要なのは明らかである。現時点では、人々の頭の中にはリポジトリに対するインセンティブよりも障壁の方が多いが、インセンティブが解決策になる可能性もあることは明らかである。

参考文献

BBC Motion Gallery, (<http://www.bbcmotiongallery.com>).

BizED (<http://www.bized.ac.uk/>).

BUFVC Moving Image Gateway, (<http://www.bufvc.ac.uk/gateway/>).

EEVL (www.eevl.ac.uk).

FERL (<http://ferl.becta.org.uk/>).

Gadd, E., Oppenheim, C. & Proberts, S. (2003) RoMEO Project. Available Online:

<http://www.lboro.ac.uk/departments/ls/disresearch/romeo/>, [accessed 20.12.05].

HEA Engineering subject centre resource database, (<http://www.engsc.ac.uk/er/resources/>).

JACS Coding system, (n.d.) Available Online: <http://www.ucas.ac.uk/higher/courses/jacsclass.pdf>.

[accessed 19.12.05]

JORUM, (www.jorum.ac.uk).

MERLOT, (www.merlot.org).

MIT OpenCourseWare, (<http://ocw.mit.edu/index.html>).

OWL, (<http://www.owl-elearning.ac.uk/>)

SCRAN, (<http://www.scran.ac.uk/>).

Stòr Cùram, (<http://www.storcuram.ac.uk/>).

TRILT, (<http://www.trilt.ac.uk>).

UK Centre for materials education, (<http://www.materials.ac.uk/>)

Yorkshire and Humberside Learning Repository, (<http://www.yhlearning.org.uk/>)